

露助の表象

——日露戦争期における敵としてのロシア兵イメージをめぐって——

向後恵里子*

1. はじめに——〈敵〉のイメージ

ろしや・やばんこく

昭和元年生まれの祖父から、小学生の時分に次のような日露戦争の尻取り歌を教わったことがある。

りくぐんの・のぎさんが・がいせんす・すずめ・めじろ・ろしや・やばんこく・
くろばときん・きんたーま・まっかるーふ・ふんどし・しめた・たかしゃっぼ・
ぼんやり・りくぐんの…

「りくぐんの・のぎさんが」からはじまって、最後はまた「りくぐんの…」と節をつけて続けていく。この歌は詳細が定かではなく、細部に異同がありながらも、多くの地方で歌い継がれているようだ。祖父もおそらく、自身の子どもの頃に愛唱していたものと思う。自分がこの歌を教わった幼い頃には意味が良くわからないままに覚えてしまっていたが、書き直していけば「陸軍の・乃木さんが・凱旋す・雀・目白・露西亜・野蛮国・クロパトキン・金玉・マカロフ・禪・締めた・高シャッポ・ぼんやり」となるだろう。

「陸軍の乃木さん」は分かりやすい。日露戦争時に第三軍司令長官として旅順攻略作戦を率いた乃木希典である。雀・目白は置いておいて、子ども心に意味の分らなかったのは「くろばときん」と「まっかるーふ」である。「くろばときん」は日露戦争時にロシア陸軍の極東軍総司令官であった陸軍大将クロパトキン、彼は「黒鳩公」と漢字があてられた。「まっかるーふ」は、ロシア海軍の太平洋艦隊司令長官マカロフである。おそらく「陸軍の乃木さん」が「凱旋」したあとに作られたであろうこの歌は、自軍の将軍の名よりも敵軍の将である「くろばときん」「まっかるーふ」の名をあげながら、「ろしや・やばんこく」と繋げる。楽しい節回しと子どもの喜ぶ下ネタの入ったこの歌に、なにかしらほの暗いものを感じたのは、この「やばんこく」の響きであった。そこには敵愾心を基調にした、〈敵〉イメージの表出がある。

ホモ・ホスティリス
敵 対 人

〈敵〉のイメージがどのように展開したかについては、古今東西に様々な事例がある。ふたつの陣営が争うとき、それが神話であれ報道であれ、敵と味方のはっきりと区別された形象をとともなうものは少なくない。こうした〈敵〉のイメージについて、その心理学的「元

型」をあげ分析したのはサム・キーンによる『敵の顔 憎悪と戦争の心理学』である¹⁾。同書では「敵対人」^{ホモ・ホスティリス}、すなわち敵をつくりだす人間として定義された人間のイメージーションが、複数の視点から分析されている。さきの「やばんこく」という響きのうちに、幼心に感じていたのは、ホモ・ホスティリスとしての人間の声であったかもしれない。

この〈敵〉イメージは、〈敵〉だけを形成するものではない。〈敵〉のイメージは、とりもなおさず〈味方〉、すなわち戦う〈われわれ〉のイメージをも同時に、かつ対比的に作り出すものである。この点については、アーサー・ボンソンビーによる第一次大戦の総力戦下の状況における「戦時の嘘」²⁾から編まれた、アンヌ・モレリによるプロパガンダの次の10法則が明瞭に示している。

1. われわれは戦争をしたくはない
2. しかし敵側が一方向的に戦争を望んだ
3. 敵の指導者は悪魔のような人間だ
4. われわれは領土や覇権のためではなく、偉大な使命のために戦う
5. われわれも誤って犠牲を出すことがある。だが敵はわざと残虐行為におよんでいる
6. 敵は卑劣な兵器や戦略を用いている
7. われわれの受けた被害は小さく、敵に与えた被害は甚大
8. 芸術家や知識人も正義の戦いを支持している
9. われわれの大義は神聖なものである
10. この正義に疑問を投げかける者は裏切り者である³⁾

ここにあげられた10項目のうち、2、3、5、6、7、そして10と、半数以上が〈敵〉について言及し、〈敵〉とは誰か、どのようなものかを示している。ひるがえって、そうした〈敵〉に敵対するのが、〈われわれ〉の正義となる。もちろんこの10法則が、あらゆる戦争のプロパガンダに共通するものではない。しかし、様々な戦争の遂行において、こうした敵と味方を対置するイメージの形成が、きわめて有効なプロパガンダとして機能した／している点については論を俟たないだろう。〈敵〉の描写が〈われわれ〉の輪郭を逆照射してかたちづくる。それは、日露戦争においても例外ではない。

本稿はこうした〈敵〉のイメージについて、日露戦争（1904-05年、明治37-38年）におけるロシア兵の表象を対象に考察するものである⁴⁾。それらの多くは、当時非常に多く使われた語彙としては「露助」に相当するイメージである。この「露助」という言葉は戦時下のマス・メディアに頻出するが、公式の文書ではなく、より大衆的な報道・逸話・物語といった言説空間に見られる。したがって、考察の対象は新聞・雑誌、錦絵など、より大衆的な性格をもつマス・メディアにおけるイメージとした。公的な場に少ないのは、あくまで「露助」は俗語であり、必要以上にロシアを蔑視することが戒められていたためでもある。この点については後述するが、勝利すべき相手がロシア、すなわち白人の国であるという要因は、日露戦争における〈敵〉のイメージーションに大きく影響を与えている。

2. 集合的な〈敵〉としての「露助」

ろ・すけ

まず「露助」という言葉について整理しておこう。「露助」とは今日一般的に、ロシア人に対する蔑称として解されることが多い。『日本国語大辞典』第二版（小学館、2000年）では、「露助」とはロシア語の「Russkij [Русский、ルースキー]（ロシア人）」の意をもじって人名のように表した語であり、「かつてロシア人を軽蔑の意を含めていった語」と説明される。米川明彦による『日本俗語大辞典』（東京堂書店、2003年）も、「ろすけ（露助）」を「ロシア人を罵って言うことば」とする。『広辞苑』第6版（岩波書店、2008年）もまた「ロシア人をあざけていう語」としているが、その語源については「Russkii（ロシア）の転訛か」と保留している。

実際のところ、「露助」という言葉がなにをもとにいつから生じ、どのように広がったのかについて断定するのは困難である。1932-35年に刊行された大槻文彦の『大言海』（富山房）では、「〔露西亜語ニ、露国人を Russkii ト云フヲ、日本化シタル語、日本人ヲやぼんすきイト云フ類〕露西亜人ヲ嘲り呼ブ語。日露戦争当時ニ始マル」と、そのはじめは日露戦争当時であるとされている。たしかに、露助という単語を新聞記事検索や図書検索などでひいてみると、蔑称として使われはじめたのは日露戦争時のことであるのはほぼ間違いないようだ。それ以前には「露助」は人名として登場しており、ロシアの表記には「魯西亜」のように「魯」の字が用いられることも少なくない。それが日露戦争を経て、「露助」は蔑称へ、ロシアは「露」へと定まってゆくようである⁵⁾。

この新しさを示すように、日露戦争以前の辞書には「露助」の語は見られないようだ。日露戦争後に刊行された辞書をひいてみると、次のような記載がある。

「ロースケ [露助]」「①（「ロスキー」の転）「ロシア」人をのゝしりていふ語。②転じて、人をのゝしりていふ語。」（金沢庄三郎編『辞林』、1907年、三省堂）

「ろすきい」「露国人ノ通称ニ何何すきい斗云フノガ多イノニ本ヅイテ、日本デ露国人ノ称。イヤシメテノ語。＝ロスケ。」

「ろすけ（露助）」「前の転」（山田美妙編『大辞典』下、嵩山堂、1912年）

ここに見られるように、ロシア人をあざけり、相手を卑しめて呼ぶ語であることは変わらない。『辞林』では人を罵る言葉の意にも転じている。後者の山田美妙編『大辞典』では、「ろすきい」と「ろすけ」とが別に項目立てされ、「ろすきい」はロシア人の通称に「〇〇スキー」の多いことから生じた言葉で、それが転じて「露助」という蔑称になったとされる。「ルースキー」説と「〇〇スキー」説、いずれにせよその背後には、当時の日本におけるロシア語・ロシア文化の受容の動きが感じ取れる。「露助」と漢字表記されるときに、蔑みや卑しめの意がより強くなるようだ⁶⁾。これには次に述べる「助」のイメージが大きいようである。

「助」

この言葉が生まれた日露戦争当時、『読売新聞』紙上で掲載されていた「滑稽問答」では、「露西亞人を露助と云ふ理由如何」という問いに次のように答えている。

「露西亞人を露助と云ふ理由如何」（青山白水生）

一説に露兵ハ女に目がない、大将の黒鳩公〔クロバトキン〕までが怪しい看護婦を連れ廻るから、助の字を加へて露助と云ふとの事だが、是ハ間違ひ、其实何処の戦争でも、一度も勝つた例なく、負けた揚句にお助け下さい〜と降参するから、そこで露助、平家の大将維盛ハ、源氏に敗けて吉野へ逃げ込み弥助となり、親への義理と名を付けて、お里にチョツカイを出す横道者、湯屋の三助ハ人の垢を摩つて飯を喰ひ、芸者の屑ハ圓助で往生、人間と生れて助の字を付られるやうになつてハ、到底浮む瀬無し⁷⁾。

回答者は「助」に注目し、「女に目がない」「助平」説を間違いとし、「お助け下さい」という弱さを強調した説がとりあげられ、「助」のつく厄介者を列举したあと「到底浮む瀬無し」としている。ふたたび同じような問いが開戦から1年あまりたった1905（明治38）年5月に「敵愾生」から寄せられると、さらに唾の度は強くなる。阿呆陀羅經が調子よく、国は広くて兵隊が脆い、と様々な口遊びを「ろすけ」の音にたくして歌っている。

「▲露助といふハ如何なる義ぞ。」（敵愾生）

ロスケの称呼に就てハ故事来歴沢山あり、阿呆陀羅經の文句に曰く、国は広助、兵隊脆助、ヨロ〜ヨロ助、ヘロ〜ヘロ助、コロ〜コロ助、慾が深くて、ロ助同様、人の物ドロ助、財政困難、財布がカロ助、一体全体、性根がワロ助、女見りやノロ助、何でも子ロ助、我と我面、泥をヌロ助、今となつてハザマを見る助、ポコ〜〜、是で大概お分りでげせう⁸⁾。

「ウヌ露助ッ」

日露戦争下にあつて、「露助」は、軍人も民間人も、敵愾心をたたきつける集合的な〈敵〉イメージとして広く使つていったようである。とくにメディアで日々報じられ、講談師によつて語られる戦場は、「露助ッ」と叫んで打ちかかる、または「露助奴ッ」と発しながら打ちたおされる、その双方の言葉で満たされているかのようである。

もちろん突撃の際やいまわの際にそうした言葉を発することができたかどうか、それを記者や講談師の誰が耳にできたかと問えば、実際には不可能な部分が多いだろう。同一人物の逸話であっても、ある時は「露助」と叫び、ある時は異なるといった事例は枚挙に暇がない。

たとえば、九連城攻略において豊河の渡渉作戦に従事した上等兵大橋啓吉は、敵前に軍服を脱いで裸身で川を渡り、敵陣へそのまま入つて敵の銃を奪ひ、敵を幾人もその銃床で撲り倒して陣地の奪取に貢献したという⁹⁾。その勇壮な戦いぶりのため、彼の履歴書とその奪ひ取つた銃とが天覧に達したと伝えられる（図1）。ここに錦絵から、その様子を抜萃する。

「日露交戦紀聞 近衛歩兵上等兵大橋啓吉君」

五月一日九連城総攻撃ニ瓊河ノ渡渉点ヲ探ルベキ命ヲ受ケ直ニ戎衣ヲ脱シ裸体トナリ銃ヲ戦友ニ託シ短剣ヲ腰ニシテ水中ニ躍リ込ミ弾雨ヲ冒シテ右岸ニ達セリ（…）敵中ニ闖入セシヲ以テ上等兵ハ裸体ノ儘依然先頭ニ立チテ前進ス（…）然ルニ一人アリ身ヲ叢ノ裡ニ匿シ銃ヲ擬シテ狙撃セントセリ此瞬間スクト見タル上等兵ハ「ウヌ露助ッ」ト叫ビツ、走りカ、リテ敵ノ銃ヲ奪ヒ取り一撃ノ下ニ之ヲ撲殺シタリ。（…）（図2）¹⁰⁾

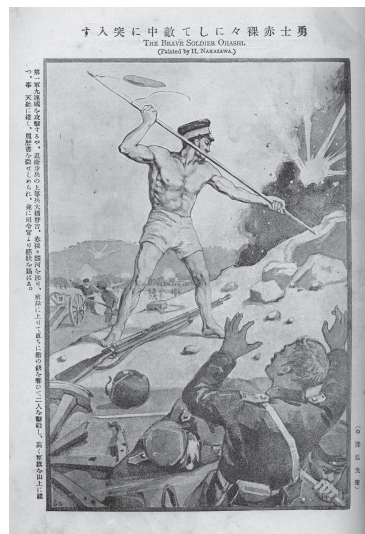


図1 中澤弘光「勇士赤裸々にして敵中に突入す」『日露戦争写真画報』4（博文館、1904年7月）

大橋が裸身で川を渡り、敵陣で銃を奪取し殴りかかるときに、「ウヌ露助ッ」の叫びが挿入されている。この「ウヌ露助ッ」のなかには、物陰から狙撃しようとする敵の“卑怯なふるまい”への怒りが見える。そしてその勢いのままに銃を棍棒のように振り下ろす。見ようによっては非常に野蛮でもあるこの裸身の勇者は、しかしその身を防御せずに弾雨にさらし、怒りを打撃に変えてゆくことで、正義の力の化身となっている。さらに、銃を敵から分捕るという点は、相手のお株を奪い、上回ってゆく表現としても直接的な効果があるだろう。

この時期のメディアを通して語られる様々な兵士の逸話や美談は、勇ましい奮闘のイメージとともに、「露助」の使用を広めるはたらきをしたと考えられる。様々な兵士の逸話における、科白としての「露助」の多用をふまえれば、前線の兵士にとっても銃後の人々にとっても、戦場において「露助」という言葉が似つかわしい、「露助ッ」と叫んでもおかしくない、ここは叫ぶ場面だ、という共通理解が広がっていた様子がうかがえる¹¹⁾。

ここでのロシア兵たちは、「露助ッ」とまとめて呼ばわれ、打ち懲らされる無名の存在である。斃される多くの「露助」たちの姿は、固有名を有する多数の日本兵士たちの呐喊姿と対比して、弱々しく息も絶え絶えで臆病に描かれる。この戦闘イメージは、人々のあいだに弱い〈敵〉、卑怯な〈敵〉と英雄的な〈われわれ〉の姿を明瞭に示しながら、見るものを自然と〈われわれ〉の裡へ同調させてゆく。〈敵〉は〈われわれ〉にやっつけられ、斃され、逃げてゆくのみである。

3. 天晴れな敵（立派な日本）——沈むマカロフ

「大国民」としての態度

先に触れた通り、敵愾心をたたきつけ



図2 右田年英（梧齋）「日露交戦紀聞 近衛歩兵上等兵大橋啓吉氏」（秋山武右衛門（滑稽堂）発行、縦大判三枚続、1904年）（個人蔵）

る「露助」表現の一方で、日露戦争においてはロシアへの過剰な蔑視が戒められていた。とくに開戦の初頭、白熱する報道を前に、政府や軍の関係者からの冷静さを喚起する記事がたびたび発せられている。たとえば陸軍大臣であった中将寺内正毅は、談話として次のように述べている。

我国民が今日に於て注意す可きは、飽く迄も正々堂々たる大国民的態度を有たねばならぬと云ふ事である（…）国と国との争ひは（…）車夫馬丁の喧嘩と同一視して粗野放漫の言動を試みる様なことは厳に慎まねばならぬ。／露国は言ふ迄もなく我国の国敵である、が既に国敵として認むる以上は多少敬意を払ふて之れに向はねばならぬ、新聞紙杯も此点に注意して、余り醜陋野卑に渉る様な文字は使はぬことにして欲しいのである。／出征軍人をして塵毫も後顧の憂無からしむる事、此一事は実に存内同胞が自ら任じて当らねばならぬ義務である、（…）／国民たる者は（…）、憂鬱遲疑徒らに当局者を牽制し士氣の勃興を沮止する様の事があつてはならぬ、けれども又妄りに快哉を絶叫して軽躁浮薄の言動を為してはならぬ。要するに何れの場合に於ても大国民的態度を確持して着実真面目に大事を成し遂げる覚悟をせねばならぬ¹²⁾。

くりかえされる「大国民的態度」とは、「粗野放漫」「醜陋野卑」「憂鬱遲疑」「軽躁浮薄」ではない、「正々堂々」とし敵国へ「敬意」をはらう「着実真面目」なものである。こうした言辞が見られるのは、毎日の戦況報道に湧くメディア環境のなかで、人々がいかに一喜一憂したかを裏書きするだろう。この情動のほとぼしりが、ややもすれば大きな落胆へ、さらには政府・軍部への不信へとつながることがおそれられたと考えられる。実際にその憂慮は、日比谷焼打事件における騒擾として現実のものとなる。戦場の軍人を思い、そのために義務をつくせという言葉とあわせて、挙国一致して戦争にむかう「国民」感情が醸成されている様子うかがえる。この「国民」としてのアイデンティティ形成は、戦争の勝利によって文明国・一等国として列強に並び立んとするうえでは急務であった。

天晴れな敵と武士道

こうした背景のもと、武勇に富んだ「天晴れな敵」との正々堂々とした戦いが描き出された。これは、〈敵〉を劣った「ちゃんちゃん」と見なすことの多かった日清戦争とも、「鬼畜米英」という人ではない〈敵〉の生まれた太平洋戦争とも異なる、日露戦争に顕著な特徴である。「露助」の兵士たちを率いるのは、「露助」ではあるが武勇に優れた軍人だ——「敵もさる者」。

この〈敵〉イメージについて、キーンの『敵の顔』は、「あっぱれな敵——英雄的な戦い」という1節を割いている。キーンは神々の戦いから騎士道を経て近代に至る、好敵手との死の遊戯——非常に厳密なルールを遵守して行われる英雄的な戦争のイマジネーションを指摘する。この伝統は近代戦以降、戦闘員と非戦闘員とを区別しない無差別の攻撃、そして核兵器によって決定的に不可能となったものである。この、敵を英雄視する伝統のなかに、日本の武士道も例示され、武士階級において発達した戦闘や格闘技では「相手への尊敬が要求さ

れた」とされる¹³⁾。キーンは続けて「鼠の駆除や、人間以下の劣等種の屠殺に勝利しても、何の誉れにもならない。(…)英雄的伝統においては、戦士と敵との間には互いの尊敬、同情、賞賛の関係すらある」と述べている。

この英雄的戦争観における〈敵〉は、好敵手でなければならない。ひ弱でなぎ倒されるようであってはいけない。好敵手であれば、良い勝負を繰り広げることができる。ここにおいて、彼我の力の差はなくなり、かれとわれとは戦場において同類の、同位階の英雄となる。この考えは、白人種と有色人種のあいだに横たわるとされていた人種の優越を戦争を通して乗り越え得るものであった。日露戦争下の日本は、かれとわれとが戦場において同等に対峙し、なおかつ〈われわれ〉がその好敵手に勝利をおさめるというイメージーションを展開し、独特の「天晴れな敵」像をつくりあげた。それは、武勇に富むが天命と上司・部下（露助である）に恵まれず、〈われわれ〉の前に屈し斃れる、悲劇の英雄としての〈敵〉である。

マカロフの最期

この英雄としての〈敵〉、〈われわれ〉を引き上げてくれる、好敵手であるが敗れてしまう悲劇的な〈敵〉の最も典型的な例が「まっかるーふ」、太平洋艦隊長官マカロフとその最期である。当時軍略家としてつとに著名であったマカロフは、開戦後に旅順の太平洋艦隊長官へ任じられ、2月末に旅順へ到着し新たに指揮をとりはじめた。しかし、4月13日におこった戦闘に際して、旗艦ペトロパブロフスクが水雷の爆発にまきこまれ沈没、戦死した。その死については4月14日にはロイター通信を経た号外が出、以降日本の報道誌面を“失われた好敵手”の描写がにぎわわせることとなる。

翌15日には海軍幕僚の大本営からの談話として、いまだ戦死の状況は不明瞭であるが、「今後此人〔マカロフ〕の手際により我海軍も幾多の有益なる教訓に接することを期し居りしに、ムザ〜水雷に罹りて溺死したるは残念なり敵ながらも軍人としては坐る同情の涙を禁じ得ず(…)願はくは吾国民もマカロフの最後に対しては慎重なる弔意を表したきものなり」¹⁴⁾という文言が一面に掲載されている。おそらくこの幕僚は海軍参謀にいた少将小笠原長生と推定される。同紙面には、波にまかれるロシアの破れた海軍旗とマカロフの横顔の図が挿入されている(図3)。

小笠原は後日マカロフについて、「嗚呼マ提督の如きは古今稀に見るの雄将なり」と評し、「同提督の陣没は慥かに露国に対して根本的打撃を与へたるもの、知らず、彼れが海軍は今後如何にして其余命を保たむとする乎」¹⁵⁾と語った。5月8日に発行された『日露戦争写真画報』第2編の戦報では、マカロフは「希世の名将」であり、彼の死によってロシアは「一あり二なきの将器を失ひたる」という。彼の奮闘は「天晴我が好敵手たるに恥ぢざるの技量」を示していた。そして「我が東郷將軍も亦、得安からざる好敵手を失ふて、想ふに黯然たるものあ

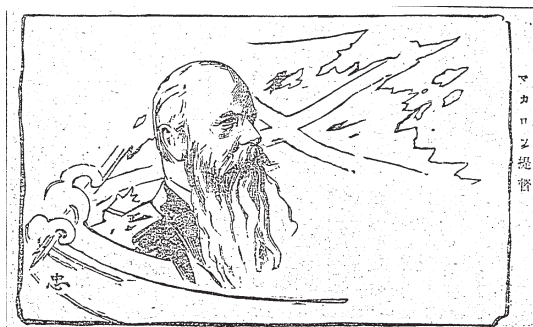


図3 河合英忠「マカロフ提督」(『東京朝日新聞』1904年4月15日)

るべし」と想像されている¹⁶⁾。

沈みゆく英雄

マカロフは、こうして惜しまれ追悼されるべき〈敵〉となった。そのイメージをかたちづかったのは、まずは人々の通俗的な英雄像であった。図にあげた戦争錦絵において、マカロフは自らの足もとで沈みつつある艦を最後の舞台とするように、見得を切るような身振りで描き出されている(図4)。画面右側から左奥へからだを向け、暗い水底に沈みゆくマカロフのイメージには、その死に先駆ける3月に旅順口で戦死し、やはり水底に沈み軍神となった海軍中佐広瀬武夫のイメージを重ねて見ることができるだろう。広瀬もまた、画面の右側から左を眺め、その先にまつ還らざる瞬間を予期させる構図のなかに立つ(図5)。彼我の英傑は、時をおかず旅順の海に沈んでいったこととなる。

この構図は、さかのぼって西南戦争における西郷隆盛の一図をも想起させる(図6)。波

間にゆられる船上の英雄が、人智をこえる大きな流れのなかで命を失ってゆくというこの構図は、マカロフ—広瀬—西郷が近代の戦争錦絵における敗軍の将の図像伝統のなかで結びついている様子を示している。この結びつきは人々の間に共有されている武士としての英雄像をよびおこし、そのイメージの連なりのうちに天晴れな〈敵〉を形象化するものである。とはいえ、敵/味方の境界はなくなっているわけではない。マカロフにおいては敗軍の将をまちうける悲劇としての文脈が、広瀬の場合は勝利のための尊い犠牲という英雄叙事詩的な文脈がそれぞれのイメージを支えている。

詩文においても数々のマカロフを悼む作品が作られた。その最も有名な例は、おそらく石川啄木が『太陽』10巻11号(1904年8月)に掲載し、第一詩集『あこがれ』におさめた「マカロフ提督追悼の詩」であろう。啄木は「旅順の黒漚裡」に静かに沈む「偉おほほなる敗者」マカロフを、その「最後の瞳」をうたう。詩の最後は以下のように結ばれる。ここにおいてマカロフは、「敵も味方も」こえて崇高な死を体現する存在となっている。

水無月くらき夜半の窓に凭り、



図4 年光「旅順港第八次海戦 マカロフ中将憤死ノ図」(松野米次郎発行、縦大判三枚続、1904年)(出典：小西四郎『錦絵幕末明治の歴史』第12巻、講談社)

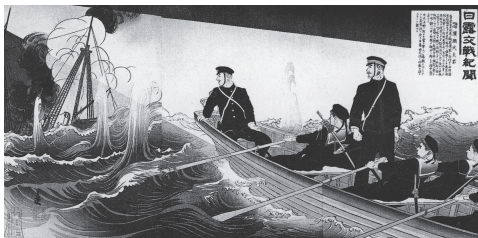


図5 右田年英(梧齋)「日露交戦紀聞 海軍中佐廣瀬武夫君」(秋山武右衛門(滑稽堂)発行、縦大判三枚続、1904年)(出典：小西四郎『錦絵幕末明治の歴史』第12巻、講談社)



図6 月岡芳年「西郷隆盛切腹図」(大倉孫兵衛発行、縦大判三枚続、1877年)(出典：『描かれた歴史』展図録、兵庫県立近代美術館・神奈川県立近代美術館、1993年)

／燭にそむきて、静かに君が名を／思へば、我や、音なき狂瀾裡、／したしく
君が渦巻く死の波を／制す最後の姿を観るが如、／頭は垂れて、熱涙せきあへ
ず。

君はや逝きぬ。逝きても猶逝かぬ／その偉いなる心はとこしへに／偉霊を仰ぐ
心に絶えざらむ。

ああ、夜の嵐、荒磯のくろ潮も、／敵も味方もその額地に伏せて／火焰の声を
あげてぞ我が呼ばふ／マカロフが名に暫しは鎮まれよ。

彼を沈めて千古の浪狂ふ／弦月遠きかなたの旅順口。(甲辰六月十三日)¹⁷⁾

敵であれ味方であれ、勝者であれ敗者であれ、その戦場での死の崇高さにひとしくうたれる態度には、ヒューマンイズムの萌芽を見て取ることもできるだろう。しかし啄木自身がトルストイの非戦論に触れるのはこの詩の書かれたよりも後のことである。当時の読者たちの文脈をかながみれば、この詩は「偉いなる心」をもつ英雄の、水底へ沈むその最後の煌めきをとらえ、遠い海原の戦場を浪漫的に幻視するものととらえることができるだろう。本作のなかほどにおいて、かれ-マカロフを、われ-「詩人」啄木は、「我が友」と呼ぶ。かれとわれとは、かなたの距離をこえて、涙とともに結びつく。

4. おわりに——〈かれら〉と〈われわれ〉のイメージ

日露戦争における〈敵〉のイメージは、一方では集合的な「露助」という言葉を通して、卑しさと嘲り、そして怒りの対象となり敵愾心をたたきつけられるものであった。「露助ッ」と叫び、呐喊する日本の兵士たちの姿は、打ち懲らされる露兵の姿と組み合わせられることで、人々のあいだに〈敵〉に優り勝利する〈われわれ〉の姿をはっきりと示すこととなった。また一方で、文明国・一等国として白人種と対等に戦うというねらいから、負けつつある「天晴れな敵」の表象も生まれた。とくに様々な修辭とともに表されたマカロフの敗軍の将としての姿は、負けゆく英雄として典型的なものである。

両者を総合してみると、そこには常に〈われわれ〉の勝利が含意されている。弱い「露助」にはたやすく勝ち、好敵手たる「天晴れな敵」とは命を惜しまぬ彼我の武勇を競う。「敵もさる者」——しかり、それに打ち勝つ味方の姿を見よ。〈かれら〉と対等に戦えるばかりか勝利する〈われわれ〉なのだというメッセージが、〈敵〉の姿から〈われわれ〉のあるべき姿を逆照射する。

日露戦争において、〈敵〉と勇敢に対峙するこうした戦闘を描写する時のキーワードは、〈大和魂〉と〈武士道〉である。〈大和魂〉および〈武士道〉についての考察は他稿を準備する予定であるが、本稿で概観した〈敵〉のイメージとの対比から考察してゆくことができるだろう。武略に富んだ素晴らしい好敵手を前に、互いに身命を賭してはたらき、忠勇を発揮し犠牲をはらう場を得て、〈武士道〉はより明瞭にその「道」を輝かせることになる。強い敵をさらにこえてゆく、いっそう強く正しい〈われわれ〉は、兵士たちの戦場と、先に引用した寺内の言葉を借りれば「大国民」としての銃後空間とをつなげてゆく。その紐帯をなす〈大和魂〉は、やはり〈われわれ〉が皆すべて有しているはずのものとなるだろう。

注

- 1) サム・キーン著、佐藤卓己、佐藤八重子訳『敵の顔 憎悪と戦争の心理学』〈バルマケイア叢書2〉柏書房、1994年。
- 2) アーサー・ボンソンビー著、永田進訳『戦時の嘘 大戦中の各国を翔け廻つた嘘のとりどり』東見社、1942年（Arthur Ponsonby, *Falsehood in War-time: Propaganda Lies of the First World War*, London: G. Allen & Unwin Ltd., 1928.）。
- 3) アンヌ・モレリ著、永田千奈訳『戦争プロパガンダ10の法則』草思社、2002年（原書 *Principes élémentaires de propagande de guerre* の出版は2001年）。
- 4) 本稿のうち錦絵については拙稿「店前の戦争——日清・日露戦争錦絵と絵草紙屋」（二）（『美術運動史研究会ニュース』125、美術運動史研究会、2012年2月）において考察した。本稿ではその知見をもとに、より多様なメディアを対象に分析をこころみるものである。また以下の論考を参照した。ユリア・ミハイロバ「日露戦期ロシア人と日本／自己イメージ」『日露戦争スタディーズ』紀伊国屋書店、2004年。
- 5) 露西亜と魯西亜の表記については次を参照。熊澤徹「日魯から日露へ——ロシアの呼称」『歴史評論』457、校倉書房、1988年。また「露助」という言葉の使用については次を参照。佐藤勇介『樺太日日新聞』に見る南樺太残留ロシア人の表象——「露助」という言葉を通して——』『セーヴェル』26、ハルビン・ウラジオストクを語る会、2009年。
- 6) 英語における *Russky*, *Russki* もまた同じくロシア人に対する侮蔑の意を含むとされる。またその語源も、「ルースキー」説と「〇〇スキー」説の双方があるという（『オックスフォード新英英辞典』第二版）。ドイツ語においても *Russki* は侮蔑の意をもってロシア人、ロシア兵を呼ぶ語である。
- 7) 「滑稽問答」『読売新聞』1904年12月4日。なお本稿では引用文中の旧漢字は固有名詞などをのぞき適宜新字にあらためている。
- 8) 「滑稽問答」『読売新聞』1905年5月23日。
- 9) 「大橋上等兵」『日露戦争写真帖』2、金港堂、1904年。
- 10) 「日露交戦紀聞 近衛歩兵上等兵大橋啓吉氏」右田年英（梧齋）画、秋山武右衛門（滑稽堂）、縦大判三枚続、1904年。
- 11) たとえば軍艦初瀬に乗組んでいた梶村候補生は、爆片の直撃を受けて『『ヤ遣られたツ、残念、ロスキー』と血に染む両手を振って藻掻て居る』と言ったとされる（『実地通俗日露合戦記 39 悲惨の戦死』『日露合戦記』3、大阪新報社、1904年5月1日、19頁）。こうした最期の描写も各所に見つけることができる。
- 12) けぶり庵記「寺内中将の戦談」『日露戦争実記』第4編、1904年3月、116頁。
- 13) キーン、前掲『敵の顔』、78頁。
- 14) 「マカロフ戦死に就て」『東京朝日新聞』1904年4月14日。
- 15) 「旅順口頭悲劇の主人公（マカロフ提督の人物履歴）」『日露戦争実記』第10編、博文館、1904年4月23日、19頁。
- 16) 「敵艦沈み敵帥死す（旅順第七戦）（征露戦史）」『日露戦争写真画報』2、1904年5月8日、6頁。
- 17) 石川啄木「マカロフ提督追悼の詩」『あこがれ』小田島書房、1905年、117-8頁。